

枯尾華

上

911.3

力

上



芭蕉翁紙馬紀

とけやのたふさむかしら重くおれと
酒りこし心し泉石冷とそな納涼の
地をすに湿氣をうけて水も移る
身は軟ちけたり粘りやう新ひ色
深る腸をうらむとくことわかくもあ
るや雪のうけをむとせまを閉塞一乃
たぐくもあつた人も便をうけ立ぬ



今年純中志氣不凡七部其已抑
學為孤獨實窮之已德業之已修
其出塵亦有二十餘年之志也
其合位者因已緣之不可思
機也其志節一之天和三
年之深川之志也其志也
激于其志也其志也
生之其是也其志也其志也

之志也其志也其志也其志也
住心也其志也其志也其志也
甲也其志也其志也其志也
其志也其志也其志也其志也
無也其志也其志也其志也
其志也其志也其志也其志也
其志也其志也其志也其志也
其志也其志也其志也其志也

芭蕉世をりし盗と一をさしむる
 傳ふるし堪困の支志けくうのひら
 ちのつし芭蕉をみとりのひらひら
 成せりの此圓覺も大巔和尚とより
 易りたりけり
 是れ或時翁を卦のてみんと
 年月時日を古曆の合せり筮考せり
 多かるく華としり卦のちり是れ

そのの爲る風を吹き雨を志ほきて
 うもむるは教を志けり成るを命
 じをなくからし世のちりはのち
 くらむもあつものふとよみこのか
 潜なるんは
 うつし
 信と聖典の瑞を感るは
 こもく料房のみ

魚のちまうやねもあつても愁むる所
 ぼくらの橋より舟を極まり塔よりむの
 ちを境とせむの浅きやと眼前の奇
 景も推してくちのせちうもあつても
 あつてもいふもとさつても聊悲しむ
 る事うさへ貞享初めとのお知利
 ちとあつても大和路よりおの真を
 どのとさへはあつてもさつてもよふ世

おあつてもさつてもさつてもさつても茶の
 羽織ひの糸芳よあつてもさつてもさつても
 あつてもさつてもさつてもさつてもさつても
 魚多く鄙のもちあつてもさつてもさつても
 と向き悲しむとあつてもさつてもさつても
 うあつてもさつてもさつてもさつてもさつても
 吟りさつても徳川とさつてもさつてもさつても
 あつてもさつても近在隣郷とさつてもさつても

ありしふるもせんは心なるもの
只の一目の如くも心を心氣らう
衰城して病序のこゝ田みちりて旅の
とくもいともん其あがり七律指所の
しつらん帰く幻住庵 後菘子記 義仲寺
おゝ所至る処の風景を心の物の
遊へるも年ちり元来混本寺沸頂和尚
子嗣法してひらり弁禪乃は師といは

可氣鉄鑄生ナりをほひきりたれも老力
くつばりすのこ句毎のこゝも華は
も自然しく山家集の骨髓をほら
あゝとやばねをこそけたの杜子美と
もつとやして貧交人の厚く喫茶の舎
盟もたつと宗鑑の酒もも教乃ひと
うゝと成る自由躰放狂躰世帯
口ゝとせしも現力に九篤實のちあ

風雅の妙もく白ひゆあさく大極了
流も雲くくひるくはたの石の長宿
流石島のゆかのかを引くしむなを
まはくこの能因本多政了兼好了ん
西し高野と寂蓮師底の縁ハ宗祇
宗長白川と道載の事居しつをく
なくあうく芭蕉翁あついであはら
みえいさくくささくれんは桑の境

そあの中らあ 奥のあきたといは十餘年が
うち林と笠とをいさくは十日も止
まる所あてをえく我胸の中を祖
神のさかりあふくはははさり住
はく也旅の心や並火施是く慈法和
尚のくこの世よあく後集しんく枕
ゆあのもあもゆ先をみるあさくあを
あはく思ひ合せしはく遊子く一

生き様くしくまはるし生涯
まうらんと田んぼもやむつる深川のなを
又立出らるる尊や筆叢も老まぬ
くも泣きく巳のまをりか心持きく
かこくまはるくわしうまのまをり
伊賀の古くまをりまをり
まをりまをりの困まをり
まをりまをりまをり

今まをりまをりまをり
まをりまをりまをり
九月廿八日膳所の曲翠まをり
らまをりまをりまをり
の昏まをりまをり
まをり伊賀山の嵐紙帳まをり
菌の埋積ツカエまをり
けあまをり例のまをり

長月晦のあけの床のあけのき泄痢度
志げくし物しよ力もあけ手足氷ゆきハ
あけあけしけしあけくしの中あけ東
京しけしけしけし膳所しけしあけ大津
しけし本節し別々州平田の李由つしあけ
あけあけ惟存しあけしけしあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ

あけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ

あけあけあけあけあけあけあけあけ

あけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけ

賀會祈禱の句

落つまわりしはありて秋集り木節
風の気元あまきや露のあや 去来
是く流る竹の枝やみそさうい 惟茲
初雪のあまきしゆりん佐古の宮 正秀
非のるすねをわや雲のいせ 之道
飛よきししをみつたうり喜喜貞 伽香
起らるも也も嶺よ湯等が 文考
あはれは俵あまきる麻酔を 吞舟

峠と浪崎のさきうりや流るるん 文州
日あけしとんが流るるの菊し列

是と生前の笑納うく木節り象を死と
よまのこころしはねるるの實くくいあま
河を取めし坐卧のしすけらねるもの
天皇舟と舎羅こころらと道うかきくしを
けうく切子心しをさそへるあまきり
つらおろそ他あまきりしと介抱の候

一のよきもねも縁よりきこし師を
 つまじくしよ白蛇はあつらふににせしに
 ありけりなまき心よらふもさつりつ
 者いししひ麻の衣の垢つまらまきと恨
 こしよまきさつり腕にに衣の衣の衣
 けしよまき錦錆のさしよまきとこのを
 むるそ口集のまねしもの面目をり九日
 十日はとたにさつりつめし其角知泉の

府治の輪とらあつらひあつらふもなつて
 し別とらさつりせきまをりかろしと思ひ出
 られりつりつりつりつりつりつりつりつり
 ちりひまきりつりつりつりつりつりつりつり
 色高のいりつりつりつりつりつりつりつり
 垢とらあつらひ十一日の大つりつりつりつり
 心とらあつらひつりつりつりつりつりつりつり
 ちりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

けちまよとくくけつけつ病床のうらみ
いんごふく懐^{フモヒ}ちのつかあふ色乃向を
かしくり乞年らの深志の通一
住吉の神のしるあふたを物さすわ
のうらみもけつしるうらみあふた
思ひのうらみ蟻通の向神の物さすわ
あふたもけつしるうらみあふた
うらみもけつしるうらみあふた

あふたもけつしるうらみあふた
膝ちゆあふた病顔をけつしるうらみ
あふたもけつしるうらみあふた

吹井しるうらみを招いんあふた
あふたもけつしるうらみあふた
あふたもけつしるうらみあふた
あふたもけつしるうらみあふた
あふたもけつしるうらみあふた

廿月の三日に船出するも、雨に帯よるふ
せし可なり。のち、さかしの表に思ふとらけくは
此の後の、このも、なるとも、たれ、けり、あ、ま、し
か、よ、業、さ、ら、い、し、ら、る、と、か、の、ま、の、い、ま、寝、を
い、て、居、れ、り、

い、つ、く、ま、の、業、の、下、乃、寒、と、り、大、州、
病、中、の、あ、ま、り、さ、ら、い、ま、り、去、来
川、流、り、ぬ、ん、と、寒、ま、笑、い、声、惟、老
志、く、ま、い、次、の、り、く、出、る、寒、と、り、支、考

お、ひ、ま、お、伊、お、志、し、ま、さ、り、正、秀
園、と、り、業、飯、の、り、お、伊、お、木、節
皆、あ、ま、の、ら、い、寒、く、い、ま、に、し、列

十二日の申刻、とうとう死絶するは、何と
睡りて、お、伊、お、り、物、打、つ、け、お、ひ、ま、り、
も、檀、み、い、ち、よ、み、の、用、さ、の、り、い、に、し
ら、川、舟、の、り、の、せ、去、來、し、大、州、と、り、
惟、然、正、秀、お、伊、お、吞、舟、お、真、う、み、次、の、り、

予よよ十人管ゆる事袖寒よ旅の
 ころききあひひよとほきとたりそよ
 芳跡きくよよはは津縁右のうくあ
 ちくく日はあひのりーよ河にまのよ
 教をのりよけし御潜の光をさしあひ
 けくちもー思ひあひのけくちも暮へ
 昔河のち今にけくちのー東南西北の
 うねけくちの柳を定ちよけくちのけくち

真松島越の白山をくまをさしあひ
 とあひさしけくちのけくちの歌あひな
 けくちのけくちのけくちのけくち
 あひさしけくちのけくちのけくち
 とあひさしけくちのけくちのけくち
 けくちのけくちのけくちのけくち
 礼多信をさしー京大坂大津船橋の
 連気振る者とりよけくちのけくち慕

あることと申すは、
百余人に澤衣そのお智月とて列の寺
つひらきく著せまのしん則長仲寺乃
直愚上人をけらひよるし門あのが
引人ら所よかひのよしく本尊塚乃右め
おらるるく土いおとあいらちのつらり
をら柳もあうらひての墓れらきうあん
やうそのまのく卯塔をのひひあう垣を

志光あう秋のそを紙を極く名のくそ
平常の風景をこのちる癖ちうらあを
所らあのく山田上はをうめてく解も
ちあおのせ漕出る舟も記念の記を
のく一熊祿の藤田家の雁遺骨を御
上の月よてしんてうらちあうあ翁
たうらんと七日り程このちうくあう
追善の真ち幸にああうハ予しうら

人々のあけおほ合感して愚ろくし紙
等の紙を残りゆるし紙もゆかりき紙
のつては我翁を忘のまん業の是を
回向乃るもつらと紙を

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誦讚

晋子

かのふりうを笠下隠かや板を毛

温石はちうく皆求る所なり 与考

は折つたをうとくむ海山平 丈艸

アとてあふ土の縁のみあし振る 惟存

つみ折し 市のちまはち紙 木節

はつたてりぬ 夕立の紙 栗由

森の名きちのちうしる月の紙 之道

世のけの茶の白鷄法こ 去来
 舟の舟田中おまをよきとひり 曲翠
 旅くく 臨く斤保をくく 正秀
 瞳の瞳子こくもく眉の物思ひ 卧高
 けのけくすりきおくくの心 泥足
 こくけおく舟の豆腐をせ活の付 し列
 ありありとくをほるあやけく 芝柏
 菊くくは葛藤子句よ 天氣 念 昌房
 車の休をばくくくく 探芝

世のけの横く後進めくく川 胡故
 真くく 下くく居あはする 牝玄
 菴のあや室いあやあ進 秋の 雨 游刀
 あやくくくくおは乃あ 蘇葉
 世のあやく集のあやくく惜まをく 智月
 多羅の芽立をくくく育つ 吞舟
 けくをわくくみり家統あ倍 土芳
 けくわくくく刀荷作る 卓袋
 四中くお發をく 脚あくく 美椿

昔よちる娘をねむるのありて 野童
 一海よちる未つむらひを痛せりたり 素聲
 糸の留ちる子に 酒 万里
 海風の思のありて 誠々
 藪くちあまうし 雀 這萃
 塩賣のつらうある 許六
 舟のゆりこみ 緋 回見
 新もけ 雀 荒雀
 くれまき 楚江

小屏はらの内より 雀 野明
 小 可なりとすり 雀 風因
 福んり子 草鞋 木枝
 女 堂みして 雀 晋子
 ひとらも侍 氣み 角上
 あまうしと 雪 之道
 あまうしと 世 去来
 挽きり 雀 土芳
 春りる 雀 芝柏

おぼんちまきく せしきわ 厨高
才子みくし 結くの子まよひ 尚白
日月の如き 川の舟の垢離 昌房
秋の空の 遠きまはるる 舟野
世の事の 執志するの 丈艸
花のまはる ちかしの 惟然
お養の 粥くらた 美椿
小徳の ころも 正秀
心は 石 田息

日ありく 葉の 朴吹
袋の 猫お 角上
星とハヤ 人遠き 泥足
七ツの 舟の 尚白
二季は 舟の 卓袋
内なる 舟の 探芝
うしり山を 遊刀
け牛を 楚江

ふりあふの地えりあふく名を舟魚光

社はえ五帝十帝立をくくみ 晋子

祈くくく代友林 殿 風國

寺溢る水上姓を引けけく 文考

乳母と隣く送る啼児 正秀

柳多條の拍子あけある昼下り 丈艸

雨氣乃をく午尾くくく 昌房

在所く替所の普法ををわ 即高

片所をくく 畠新 田 之道

をわくの仕合くくく骨のえ 吉来

木像くくく傍ふをゆるく 泥豆

とまうははむくく牛白くく 高白

なまのくくくりよる名内 卓袋

漣ア我をのくくく水の天 角上

経よりむくくくも志のハ聖霊 牝玄

かろくくを花くくく人ハ負け味 土芳

村よりりりりハ伊舞講の種 芝柏

暇あをくくく小舞のあき 加城 這萃

軍と介しを祀又ぐる物 卧高

淵を淵く後埜の上を過る 晉子

新目あもふ念珠押もむ 正秀

美人のまほづらん也暑寒 文考

動りもぬえ替り大小の額 魚光

味つきのゆゆ力あわし也 楚江

かみ華一の何り可笑ふ 游刃

まろくも恨しゆささりばし 風國

新赤うゆるさる酒の碎 之道

白鳥の陰を暮らさ子孫せりけ 探芝

と河あかりハ天下一 去来

飯あつ内かえもゆるさの丹 尚白

叩者子積をみくもくか 田危

うら寒ふ塚格子の窓ゆき 芝柏

文庫をあらん福山伏 土芳

ほきもあて五月の目のせき 惟徳

海くも也ふ赤庫川のあ 夫艸

寮あがる外より鎖をうけせ 牝玄

思くく怖の真み戒名 支考
青天よちるさうくむのうらむく 去来
巢しーまうらう千里考 正秀

七五十一人満ち真行大津膳所
京嗟哉括津伊賀之傳衆也各
感愁眉而不求巧言也

傷亡師終事作句 初七日迄

志せねば色をも十夜の泪うふ 京を味

啼うちの和氣をちのせ涙樹 傳李由

母の泣く声も寒ふととちる 大津木常

つるやの宗祇も寸白の夜 日し列

りつるも涙をちの涙の夜 膳不昌房

世の墓をゆるくやあを殺す 傳大州

了心の勢多しとものいん帰む 吉根許古

用とアひきく終りの母の心 同波村

墓中より十子あやせのくねり ぞ探芝
 お席み満ちあはれや水の糸 大津楚江
 ぬくも着の老の髪は 吾の糸 四田成典
 木立掃やあまうりしは 塚の上 大つ健
 日影こゝろ 塚りくねや 塚あり 日あり
 月雪よせおゆみや 笈の脚 傍千那
 志け縮子 稚子あやみ 沙都小 大つ尚白
 了せ翁の涙ありけり 奥羽塞をゆく
 くらげの呈書をよみゆく ちりちり
 くらげのあやうりちりちり ちりちり
 ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり 京嶺士
 とせぬもの寒と春の色は 浮角上
 浩浩の雪よけて 墓の糸 京野童
 一歩も歩かぬ 泣なみせん 塚の麻 日風園
 身もあはれ 色のもも ちりちり 伊勢幸芳
 悲しきも ちりちり ちりちり 日阜袋
 我も ちりちり ちりちり 大坂之石
 石も ちりちり 墓も ちりちり 日芝拍
 藤の ちりちり 悲しき 野山小 傍支考

入月や日比の敷衣の無衣

京春沈

十六日晉子を勾住庵平くともあひ
あひのくき新とさしつ推のゆきとさ
あひすことく平侍をさしつ推の

あひしや何を力あつてくるそ

曲翠

あひしや何を力あつてくるそ

正秀

あひしや何を力あつてくるそ

卧高

あひしや何を力あつてくるそ

泥足

あひしや何を力あつてくるそ

霊椿

あひしや何を力あつてくるそ

晉子

九つん 何のそり 枯柳

燒鐵柳

線 虫の物 蔭の物 枯色蕉

月荒雀

神々の子もも 啼 戸 縁の塚

大坂吞舟

そ 芭蕉 衣のそけて 月うそ

ぢ魚光

まののそ 神のそり ち 墓のそ

日回鳥

悔まぬく 世のそり ち ち ち

日游刀

まのそり ち ち ち ち ち

日朴吹

まのそり ち ち ち ち ち

大木枝

まのそり ち ち ち ち ち

ぢ這草

けはのつるをすう土の恣 大は土竜

ちり疎のあらふ様のわさる ぞ遊を

しらんをひてえはる塚の素 日伴九

縁にけし涙みあらふゆる也 ぢや女

二七日朝露之悱句所と文通

吾もわく徳の光田わみ山 ときぬ

小破荒戸あはふ自らのけりる 尺草

みこの目も師よまふのるもあは 大坂か柿

けりるやあはるるも柿 ぞ北玄

間もさうしてちつる余也村のる 日吾我

木のまゑえと世の形やらのみさ 日松泉

けりるえはるみせん丸は巾 日朝巫

菊搔眺ん起り 馳走りふ 豊田裕隆

朝日けして暮れもあはるの塚のま 日重氏

おけけし指のきもる自りふ 女素聲

ちりけしけし聖もをみあはるる 女万里

花もをせりゆきとあはるる 東の惟然

お福のつるもあはるる 女可南

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

ぢ 徹房

ふらうつけをまも七師と女目だ

日 麻之

木名の目も庚のしるれは

日 所上

カそく 墓うけらる 向震

日 蚤鳥

糸柳のけらる 名をうけらる

向震

梅のけらる 名をうけらる

さる丸

おんつらうけらる 名をうけらる

小倉困々

幻のけらる 梅のけらる

さる有

かきく 獅のおぐらうけらる

表松木

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

この如行

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

聖田小作

くわらあはく 小坊のうけらる

大根川 ちるらうけらる

京其木

三七日 伊賀連 荒追 悔句

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

いら玄鹿

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

出岸車来

おの月 渡りまうけらる 洞ふ

浅井風睦

寒菊やあはく 梅のけらる

山田雪芝

つみくら啼くまゆのほの鴨

杉並肥方

さくらとてあはれりるる月

尾山音蘇

あはれや泪のあはれおの葉

北浦

あはれや涙のあはれおの葉

第一橋

あはれや涙のあはれおの葉

佐治河木

あはれや涙のあはれおの葉

西沢魚日

あはれや涙のあはれおの葉

明毛氏

あはれや涙のあはれおの葉

山岸尚和

あはれや涙のあはれおの葉

木枝峯

借^こ意つるあはれおの葉

大坂平

うらやまの果やあはれおの葉

猿雖

芭蕉くちあはれおの葉

市風妻

あはれの小志ぼくあはれおの葉

桂田示峰

あはれを説のあはれおの葉

井上馬解

あはれを説のあはれおの葉

後式之

あはれを説のあはれおの葉

中尾探市

あはれを説のあはれおの葉

小童 七年

あはれを説のあはれおの葉

はら萩子

松乃よ新入るる男麻あふふ 系由作木

笠乃位のるもあつし 井つぐ くらとあま

そのあつし中夜さし 守富秋

あつしつてきもあつし 太保仙杖

新くあつしあつし 松本氷固

あつしの遠よちあつし 内神九節

あつしあつしあつし 栗津よりあつし

あつしあつしあつし 七師のまき書あつし

あつしあつしあつし 活らる文字の村郷 いう半残

あつしあつしあつし 神の下 西橋百成

根あつしあつしあつし 甘藷あつし 満あ

あつしあつしあつし 同くあつしあつし 来川鳥栗

四七日あつしあつし 普音文あつし

あつしあつしあつし 伊毛銀州

あつしあつしあつし 日固交

あつしあつしあつし 日完芽

あつしあつしあつし 日宗比

あつしあつしあつし 日斗從

あつしあつしあつし 日芦本



河う合くといふは悲しよる處に 七援不

せうくまのまゝにらんあられ登 日産牧

平の夜に水鏡のこころあり 尾列高川

梅川也一羽をまねく時あり 日素炭

まゝのまゝに光ありしは牡丹の 日九次

もつゝのまゝにまゝに城の揃 元亨

ゆゑに時あまの日照りやをま 大坂伽香

持剣又し川ゆもゆる月あり みの低耳

文臺平し志あり影し古の市 伊予黄山

上巻

Handwritten signature or mark at the bottom left of the page.

